HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	本報告書の発行にあたって
Author(s)	土田, 映子
Citation	1-6 多文化世界におけるアイデンティティと文化的アイコン : 民族・言語・国民を中心に Identity and Cultural Icons in a Multicultural World : Ethnicity, language, nation
Issue Date	2020-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77230
Type	editorial
File Information	preface.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

本報告書の発行にあたって

土田　映子

謝辞

本書の元となった共同研究「多文化世界におけるアイデンティティと文化的アイコン：民族・言語・国民を中心に」の実施にあたっては、北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院共同研究補助金の交付を受けました。また、研究会開催および本書の企画・発行には、他大学の研究者、大学外の協力者、大学院生、事務職員の皆様の多大なるお力添えをいただきました。ご協力・サポートをいただいた皆様に対し、ここに厚く御礼を申し上げます。

本共同研究の背景と趣旨

本書は、平成 29（2017）年度から同 31／令和元（2019）年度までの 3 年間にわたって実施した、上記共同研究の報告書である。共同研究への参加メンバーは、1 年目と 2 年目は長野督教授（メディア・コミュニケーション研究院）、寺田龍男教授（メディア・コミュニケーション研究院）、ジェフリー・ゲーマン教授（メディア・コミュニケーション研究院）、青木麻衣子准教授（高等教育推進機構）、土田映子准教授（メディア・コミュニケーション研究院）の 5 名で、3 年目はこれにゲオルギー・ブンティロフ助教（メディア・コミュニケーション研究院）が加わった（所属・肩書は 2020 年 1 月現時点でのもの）。この 6 名は、いずれも北海道大学教育学院多元文化教育論講座の教員であり、青木准教授以外はメディア・コミュニケーション研究院多元文化教育論分野の所属である。

本研究には前段階がある。平成 28（2016）年度、同じ分野・大学院講座所属の眞﨑睦子准教授（当時）を研究代表者とする共同研究「多元文化教育の諸相」が、上記と同じ共同研究補助金を得て実施された。メンバーは眞﨑准教授の他、寺田教授、ゲーマン准教授（当時）、青木准教授であった。この共同研究は、参加メンバー個々の研究力を高めると同時に、各人の研究を有機的に結びつけて組織化し、多文化共生を始めとして様々な課題を抱える現代社会への貢献力を向上させることを目的としていた。しかし、年度末が近づいた平成 29 年 2 月に眞﨑准教授が逝去されたため、後継の共同研究計画を練り直すこととなった。

新たに土田を研究代表者として企画された共同研究の趣旨を、研究計画書から以下に転載する。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

2000 年代から続くいわゆるグローバリゼーションに対し、近年、世界各地で抵抗の波が広がっている。人や資本、情報の世界的流動性の高まりは、かつてない密度での人的交流や協働を可能にする一方で、経済格差や安全保障上の危機の発生に伴い、現実的な、あるいは想像上の「他者」との、人々が必ずしも望まない接触や摩擦を経験せざるを得ない状況を作り出した。また、近代化・産業化の進行と人権意識の浸透は、人種・民族・性的志向などによるマイノリティを主流社

会へと包摂する動きを政治や行政の分野で生み出したが、こうした社会の多様性の表出が、マイノリティを激しく抑圧しようとするバックラッシュを呼び起こしてもいる。

このような状況の中で、インターネットメディア、既存メディア、大衆文化、公教育、社会教育施設などが人々に伝達する「他者」「自己」イメージは、過去のどの時代よりも強力な増殖・伝播の力を持ち、人々の思考枠組みと政治的選択・行動に影響を与えている。こうしたイメージの形成と拡散、受容のプロセスについて客観的に検討することは、変容する日本の社会だけでなく、経済や国際関係を通してつながる他の国や地域についても、冷静に理解し現実の問題に対処するための基礎を築く。

本研究では、現代および現代史上の時代における「自己」アイデンティティと「他者」認識の形成を分析するために、「文化的アイコン」の概念を用いる。以下に定義の例を挙げる。

文化的アイコンとは、特定の文化集団にとって重要で不可欠とみなされるような価値・理想・イデオロギーなどを表象し、その集団のアイデンティティを象徴するのに使われる事物である。文化集団の中には、国、民族、宗教、独自の文化を持つと認識される地方や地域などが含まれる。文化的アイコンのよく知られた例としては……［アメリカ合衆国における］自由の女神像や、日本における桜、富士山などが挙げられる。一般的に、文化的アイコンとして選ばれた事物に付与される意味は、その事物の元々の性質や機能よりも大幅に拡張される。

（土田映子「テクノロジーが創る国民・エスニシティ―文化的アイコンとしての科学・技術と集団アイデンティティ―」兼子歩・貴堂嘉之編『「ヘイト」の時代のアメリカ史　人種・民族・国籍を考える』（彩流社、2017 年）97-98 頁）

（引用終わり）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

共同研究は 3 年計画で行い、初年度には各自での調査研究に加えて、関連の深い研究を行っている研究者を招いてのワークショップ実施、2 年目には公開講座かシンポジウム実施、3 年目には成果報告書を出版するというのが当初の目論見であった。しかし、共同研究参加メンバーの専門分野や方法論が多様な中で、一定の問題意識の共有を実現するには一年間ではあまりに学びの時間が短かったというのが実感であった。結局、２年目もワークショップを中心とした勉強の期間とすることで、何とか報告書の企画にこぎつけることができた。

次に、各年度の活動内容の概略を示す。参加メンバー個々の論文発表等については省略した。

１年目の活動概要

1 年目の 2017 年度には、同年 11 月 10～11 日と 2018 年 2 月 23 日の、計 2 回の公開研究会を開催した。11 月の研究会では、明治大学教授の石山徳子氏が講演「セトラー・コロニアリズムの地理空間　アメリカ先住民の身体と環境をめぐる諸問題」を行い、アイヌ民族の文化振興活動にかかわる葛野次雄氏・八重樫志仁氏がコメントを行った（当初参加予定だった秋辺日出男氏が都合により欠席し、葛野氏に入っていただいた）。他学部の教員・学生の参加もあった。2 月にはユニバーシティ・カレッジ・ロンドン教育研究所博士候補生の田辺陽子氏により、講演「古写真に見るアイヌ民族の表象―函館アイヌ学校とセントルイス万国博覧会を事例として―」が行われた。

この時は急遽開催が決まった会であったため、聴衆は共同研究メンバーにとどまった。

この年度の課題として残ったことは、学生の関心を高めて参加を促すことであった。特に講座所属の大学院生に対してより積極的な参加を促し、また教育面でのケアを充実させるため、基本文献のリストの作成・書籍の購入を開始した。

２年目の活動概要

2018 年度には 3 回の公開研究会開催を実現した。1 回目の研究会は同年 7 月 13 日に「先住民・難民に対するまなざしの変化と実際」と題し、一谷智子氏（西南学院大学）「『和解時代』のオーストラリア文学―入植 200 周年以降の先住民表象」と Mark Justin Rainey 氏（University College of London）“On the Front Line of the Migration Crisis: Faith-Based Support for Asylum Seekers in Manchester, UK”の 2 本の講演をいただいた。

2 回目の研究会は 2019 年 2 月 3 日、「先住民族エンパワーメントと先住民族政策の変容のための世論形成―先住民族のイメージ操作と他集団との連携―」のタイトルのもとで行われた。広瀬健一郎氏（鹿児島純心女子大学）による講演「カナダ先住民族教育における脱植民地戦略」、ナロマ・ライリー氏（東北大学他）・ポール・マオアテ氏（玉川学園他）による話題提供「文化実践を通じた民族の誇りの復興」、葛野次雄氏・八重樫志仁氏・秋辺日出男氏のアイヌ民族コメンテーターからのコメントと盛り沢山の内容となった。

3 回目は 2019 年 3 月 8 日で、「日本の入植型植民社会を揺らす先住民族：日常と非日常の視点から」と題したアン・ロスリン氏（上海ニューヨーク大学）の講演が行われた。

なお、秋には初めてこの共同研究メンバーでの科研費（基盤 B）への応募を行ったが、採択には至らなかった。研究課題は、多文化・多民族化が進行すると予想される日本社会の変化に対応する高等教育プログラムの理論的基盤を整備するというものであった。申請書は土田が執筆したが、メンバーの学術的背景の違いが依然として課題であったとともに、共同研究を通してのすり合わせ・問題意識の共有も途上であった。とはいえ、審査を通過する力を持った申請書を戦略的に作成できなかった責任は主として土田にある。力不足を痛感した次第である。

３年目の活動概要

2019 年度の共同研究補助金の申請募集が始まる前の 4 月 18 日に、「北米からの先住民文学」と題したダニエル・シャルティエ氏（Université du Québec à Montréal）による講演が北大の人文・社会科学総合教育研究棟で開催された。カナダの先住民文学を扱った氏の講演は、本共同研究のキーワードの一つ「表象」とまさに関連する内容であったため、研究上のつながりのあるゲーマン教授を通じ、本報告書へのシャルティエ氏の論文掲載が実現することとなった。論文冒頭に注記があるように、この論文はフランス語からの翻訳である。

最終年度の共同研究には気鋭の若手、ブンティロフ助教を新たにメンバーとして迎えた。補助金交付確定後間もなくから本報告書の編集企画打合せを会議やメールで行う一方で、ブンティロフ助教および一年間の在外研究から戻ってくる青木准教授に研究成果報告をしてもらうことが決まった。

また、研究会の聴衆以外の役割で学生に参加してもらう機会も最終年度にようやく作ることが

できた。2019 年 10 月 3 日、多元文化教育論講座の大学院生であるアシュレー・ドーリンさんとタッチャナ・ツァゲールニックさんの研究発表が英語で行われた。共に、アイヌ民族研究のゲーマン教授の指導学生であり、それぞれの研究内容もアイヌ民族の表象に関わるものである。その成果は本報告書に収録されている。

同年 12 月 16 日、ゲオルギー・ブンティロフ助教による講演「ビザなし交流：構造・課題・メディア」と青木准教授による講演「オーストラリア遠隔地先住民コミュニティにおける保護者の教育観—『島に生きる』ひとびとの学校選択から考える」が連続で行われた。この講演を下敷きとした報告も本書に掲載されている。

最終年度には 2020 年 2、3 月に、それぞれ研究会が予定されている。2 月 3 日には明治大学の兼子歩専任講師による、アメリカ合衆国の LGBTQ（Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender, Questioning の頭文字を取った、性的少数者の総称）に関する講演が、北大文学研究院の瀬名波栄潤教授を迎えて行われる。続いて 3 月 4 日には、サイモン・フレイザー大学（カナダ）のダニエル・ムーア教授と京都大学の西山教行教授を迎え、多言語教育をテーマとした研究会が開催される。これらのテーマは共同研究の早い段階から意識されていたものであり、詳細を報告書に掲載する時期の開催が間に合わなかったのは残念である。世界各地の先住民族、難民、国境の人々、性的少数者、多言語話者——と、国家や民族、ジェンダー、言語、文化といった人間社会のカテゴリーを行き来し、それらの規範性に挑戦する人々の営みについて、考察すべき課題の裾野は広い。3 年間の活動で、ようやくその一端を垣間見られたというところだろうか。

収録内容について

本報告書に収録された論考の一部については、すでに前項で触れた。報告書の編纂にあたり、研究会講師等としてご協力いただいた方々に寄稿をお願いしたところ、何人かの方々にご快諾をいただいた。この場を借り、改めて御礼申し上げます。

形式については、個別の事情により、報告書形式、論文形式、座談会形式と様々な形をとっている。読者には、多彩な顔ぶれが多様な役割でこの研究活動に関わった結果として受け止めていただければ幸いに思う。

北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院　多元文化教育論分野　院内共同研究

「多文化世界におけるアイデンティティと文化的アイコン：民族・言語・国民を中心に」

北海道大学教育学院　多元文化教育論講座　構成メンバー

ジェフリー・ゲーマン（メディア・コミュニケーション研究院）

◎土田映子（メディア・コミュニケーション研究院）

寺田龍男（メディア・コミュニケーション研究院）

長野　督（メディア・コミュニケーション研究院）

ゲオルギー・ブンティロフ（メディア・コミュニケーション研究院）

青木麻衣子（高等教育推進機構）

◎　本共同研究代表者

公開研究会参加メンバー

Roslynn Ang（上海ニューヨーク大学）

Daniel Chartier（ケベック大学モントリオール校）

Paul Maoate（「ナ・ハウ・エ・ファ」メンバー、玉川学園教諭）

Danièle Moore（サイモン・フレイザー大学教育学部）

Mark Justin Rainey (National University of Ireland, Galway)

Ngaroma Riley（「ナ・ハウ・エ・ファ」代表、東北大学勤務）

秋辺日出男（阿寒アイヌ工芸協同組合専務理事・阿寒観光協会理事）

石山徳子（明治大学政治経済学部）

一谷智子（西南学院大学文学部）

兼子　歩（明治大学政治経済学部）

葛野次雄氏（文化伝承者・「コタンの会」副代表）

田辺陽子（UCL ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン教育研究所（IOE）博士課程）

西山教行（京都大学大学院人間・環境学研究科）

広瀬健一郎（鹿児島純心女子大学人間教育学部）

八重樫志仁（ウワカアウンクル）

Ashleigh Dollin（教育学院博士前期課程）

Tatsiana Tsagelnik（教育学院博士後期課程）

座談会メンバー

秋辺日出男（阿寒アイヌ工芸協同組合専務理事・阿寒観光協会理事）

葛野次雄氏（静内アイヌ協会会長）

萱野志朗　「萱野茂二風谷アイヌ資料館　館長、平取町議会議員」

八重樫志仁（ウワカアウンクル）